



監修

高木市之助  
山岸德平

久松潛一  
小島吉雄

# 讚岐典侍日記

玉井幸助校註

朝日新聞社刊  
日本古典全書

玉井幸助（たまみからすけ）

明治十五年新潟縣生。明治四十三年東京高等師範學校國漢科卒業。

文學博士。昭和女子大學學長。主

著—更級日記錯簡考、日記文學概

論、日記文學の研究、日本古典全

書・柴式部日記、同・更級日記、

同・海道記・東關紀行等。

日本古典全書

「讚岐典侍日記」 玉井校助校註

昭和二十八年十二月二十日初版發行

昭和四十三年十二月三十日第七版發行

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九

州市小倉區砂津・名古屋市中區榮）

定價三八〇圓

# 目次

## 解説

その時代……………三

讃岐典侍日記の形態と内容……………一三

讃岐典侍日記の傳本……………一五

讃岐典侍日記作者考……………一八

作者の家系とその生涯……………二六

讃岐典侍日記の鑑賞……………三〇

## 參考資料

讃岐典侍日記中の人物……………四六

人物一覽表(四六)……………皇室、廷臣の項の考證(四八)……………女房の項の考證(五七)……………僧侶の項の考

證(六五)……未詳の人々の考證(六七)

堀河天皇崩御の頃の記録……………七二

鳥羽天皇御即位式……………七三

灌佛會……………七三

鳥羽天皇内裏移御……………七四

鳥羽天皇の大嘗會御禊……………七五

鳥羽天皇の大嘗會……………七六

年 表……………九六

系 圖……………一〇三

皇室御系圖(二四)……源氏系圖(三四)……藤原氏系圖(三五)……堀河院御母方村上源氏系圖(一〇八)……作者系圖(一〇九)

凡 例……………一一〇

本文

讃岐典侍日記 上

一 五月の空	二二三
二 六月二十日のこと	二二四
三 七月六日より	二二五
四 日のくるるままに	二二六
五 誰もいもねず	二二八
六 明けがた	二三一
七 日のふるままに	二三三
八 御膝のかげ	二三三
九 中宮御参内	二三四
一〇 御前の水	二三五
一一 御讓位の御沙汰	二二六
一二 御もののけ	二二八
一三 中宮再び御参内	二二九

讃岐典侍日記

- 一四 御受戒……………一三三
- 一五 定海阿闍梨……………一三四
- 一六 御重態……………一三五
- 一七 崩御……………一三八
- 一八 人々のなげき……………一四〇
- 一九 御めのとたち退出……………一四三
- 二〇 最後の御奉仕……………一四六

讃岐典侍日記 下

- 二一 院の御召し……………一四九
- 二二 とばりあげ……………一五二
- 二三 出仕のいそぎ……………一五三
- 二四 御月忌……………一五五
- 二五 御即位……………一五七
- 二六 天仁元年正月一日……………一五九
- 二七 攝政殿の参内……………一六三

二八	堀河院の經供養	一四
二九	二月になりて	一四
三〇	三月になりぬれば	一六
三一	衣がへ、灌佛會	一七
三二	軒のあやめ	一六
三三	扇ひき	一〇
三四	別るる秋	一七
三五	花のたもと	一七
三六	内裏遷幸	一四
三七	ありし昔	一六
三八	萩の戸の花	一七
三九	壁のあと	一〇
四〇	大嘗會の御禊	一八
四一	五節のいとなみ	一八
四二	雪の思ひ出	一八
四三	几帳の思ひ出	一八



四四	ある夜の思ひ出……………	一八八
四五	大和殿より……………	一八九
四六	御神樂の夜……………	一九〇
四七	周防の内侍のもとへ……………	一九三
四八	つごもりの夜……………	一九四
四九	招く尾花……………	一九五
五〇	常陸殿……………	一九六

讚岐典侍日記

玉井幸助



# 解 説

## その時代

讃岐典侍日記は、堀河天皇の末年である嘉承二年六月から、その翌年天仁元年十二月まで、或は天仁二年の記を少しく含んであるとも見える短い記録である。この日記を理解するには、その背景としての院政時代、すくなくとも堀河天皇御一代の有様を知っておくことが必要であらう。

院政時代とは、いふまでもなく、平安時代の末期にあたる約百年間を指すのであつて、藤原氏の權勢が院の御所に收められた時代であり、この院政が始まつたのは、堀河天皇の御父白河上皇の時からである。

平安時代の文化は一條天皇の御代においてその頂點に達し、絢爛たる時代を現出した。而してその文化を代表する者は藤原氏であり、藤原氏の榮華を代表する者は道長であつた。道長は御堂關白と呼ばれたが、それはいふまでもなく、彼が天下の財を傾けて造營した法成寺の御堂に住んだからである。法成寺は、當代における美術工藝の粹を集めたもので、豪華の極みをつくしたものといはれてゐる。近衛の北、京極の

東に、方四町の地を占めて經營せられ、その境内には、阿彌陀堂、釋迦堂、藥師堂、五大堂、講堂、東北院、西北院など、數多の堂宇をはじめ、八角堂と呼ばれた五重の塔、その他、經堂、寶藏、鐘樓などが並び建てられ、中にも最も善美をつくしたのは金堂、すなはち大御堂であつて、その棟や梁や柱には諸國の珍木を集め、蒔繪や螺鈿を施し、金銀珠玉をちりばめ、柱ごとに兩界曼陀羅の圖をゑがき、扉ごとに八相成道の變をあらはし、またその内部に安置せられた三丈二尺の金色の大日如來、それをとリまく釋迦、藥師、文珠、彌勒の諸像は、いづれも名工定朝の刻むところであつた。しかも本尊大日如來の蓮華座は、百葉の蓮片におのおの金色の釋迦如來を現出した莊嚴微妙のものであつた。然るに、この豪奢の記念物も、造立後三十五年、康平元年の火災でその大部分が焼失した。それは更級日記作者の夫が死んだ年である。法成寺の落成は治安二年であるから、早世したと思はれる紫式部は、その落成を見ずに死んだかも知れない。清少納言がもし生きてゐたとすれば、六十に近い年であつたであらう。とにかく、この二人は道長の全盛時代に生きて、法成寺の焼失を見ずに死んだ。更級日記の作者は、少女時代にその落成を見て晩年に焼失を見た。歴史は移る。康平の火災以後、法成寺は修覆によつてわづかにその形を存したけれども、再びこれをもとのやうに復興する力は、もう藤原氏から去つてしまつたのである。

藤原氏の権力がおさへられたのは、後三條天皇御親政の時からである。天皇は庄園の亂立によつて國家の富が個人の手に移ることを嘆かれ、條理不明の庄園を最も多く所有する藤原氏の庄園文書を徴して、こ

れを取り調べようとせられ、先づ勅使を頼通の許に遣はされたが、頼通は奏して、「臣は三朝を輔佐して國政を執ること五十餘年、その間、私田の所有者が縁を求めて寄贈するので、さうかと答へたままで年を経た。されば、文書などのあらう筈はない。叡慮のままに没收せらるるがよい」と申し上げた。天皇もやむなく、頼通の庄園だけは不問に附せられた。また頼通の弟關白教通が、興福寺南圓堂の造營にあたり、その費用のために大和の國司を重任せしめることのお許しを請うた。天皇は大きに怒らせられてこれをお許しにならなかつたが、教通は「春日の神威今日失せはてたり」といつて諸卿を率ゐ退出しようとしたので、これまたやむを得ず、お許しになつたといふことで、道長の餘勢が、まだその子たちに及んでゐたといへるであらうが、それはただ餘勢に過ぎなかつた。

次の白河天皇は、御父後三條天皇の御性質をうけて、特に剛強な御方でいらせられた。あるとき、雨のために法勝寺の御幸を果たされなかつたのを怒られ、雨を器に入れて獄に投ぜられ、また「天下意の如くならざるものは、鴨川の水、雙六の采、山法師のみ」と仰せられたほどの専政君主であらせられた。應徳三年十二月十九日、位を八歳の皇子堀河天皇に譲り給ひ、院中において親しく政をお執りになつた。院政といふことが、ここに始まるのである。

堀河天皇の攝政には、初め道長の孫師實がなつた。次いで師實の子師通が關白となり、師通の薨後その子忠實が關白となつた。しかし攝政關白はもう名ばかりの職となり、上皇が院政の君主として萬機の政を

お執りになつた。かうして藤原氏の豪奢は院の御所に移り、これまで國政上の障碍をなした庄園が、また自然に院の御所に集まり、その富力がほとんど造寺造佛に注がれ、また院中宮中の遊樂に費される情勢となつた。心ある廷臣は院政の弊を憂ひ、ひそかに堀河天皇の御親政を願つたやうであるが、御病弱の天皇は、やうやく壯年に達しようとして崩御あそばされたのである。時に權中納言であつた藤原宗忠は、その日記である中右記に、

そもそも大行皇帝八歳にして帝位に即き、九歳にして詩書を携へ、性を慈悲にうけ、心を佛法に刻み、およそ在位二十一年の間、罪を退けて賞を先とし、仁を施し恩をしき、喜怒色に出ださず、愛憎拘らず、王侯相將より上下の男女に至るまで、おのおの皆惠化に浴す。陶染堯風、今この時に當りて父母を失ふが如し。我が君才智漸く高く、すでに諸道に通じ、なかんづく法令格式の道、絃管歌詠の遊、天性授かるところ往古に耻ぢず。少齡の日より大位の年に及び、敍位除目、御意の及ぶところ道理を先とせらる。ただ恨む、時世末に及び、天下すこぶる亂る。ただしこれ偏へに一人の咎にあらず。法王已にあり、世間の事、兩方に分るるの故なり。

と嘆じてゐる。宗忠はこのやうに、時勢の衰微を院政の弊に歸してゐるが、大局から見れば、それは、節度を缺いた平安人士の遊樂生活が積もり積もつた結果であり、院政によつて生じたものとは言へないにしても、時勢の行きづまりを開かうとして院中政治の基礎をすゑられた後三條天皇の叡慮が、院政の實現に

よつて、むしろ反對の結果を生じたことは事實である。白河上皇が最も力を注がれたのは佛事であり、寺院の建立、佛像の彫刻、佛畫の製作、それに伴ふ大規模な法會の興行などは、平安時代の最後を飾る盛事ではあつたが、同時にそれは、この時代を葬り去る豪華なはなむけでもあつた。

堀河天皇は、白河天皇の第二皇子として、承暦三年七月九日御誕生、御母は右大臣源顯房の女で、攝政藤原原實の養女となられた賢子と申す御方である。御兄敦文親王は、天皇の御誕生前に四歳で夭折せられたが、この事について平家物語は次の話を記してゐる。

白河天皇は園城寺の僧頼豪阿闍梨に命じて皇子誕生を祈らせられた。その效驗によつて敦文親王が生まれ給うたので、天皇は大いに喜ばれて、頼豪の欲するところを賞與しようと仰せられた。頼豪は園城寺に戒壇院建立の勅許を得たいと申し出た。しかし戒壇院を有することは古來延暦寺の特權であつて、もしこれを園城寺に許すと、兩寺の間に騒亂の生じることが明らかであるから、他の賞で代へることを再三お諭しになつたが、頼豪は應じない。つひに斷食をして死んだ。しかも死に臨んで、おそろしい言葉をのこした。「皇子はわが肝膽を碎いて祈り出したのであるから、われまた、これを取り殺し奉らん」と。果たしてその言葉の通り敦文親王は夭折せられた。天皇は更に、このたびは延暦寺の僧良眞に祈らせて堀河天皇の御誕生を見給うた。

もちろんこの話は、迷信にもとづく俗説であらう。しかし、このやうな俗説が行はれたのも、その時代



のせみで、清淨心に安住することを教へる僧侶の間に、このやうな煩惱が燃え上がつてゐたほどであるから、廷臣間には官位の爭奪が行はれ、一般民心は名利を追うて道義を捨てる有様であつた。上下ただ飽くことのない欲望を満たさうとするから、不平不満は鬱積するばかりである。その鬱積は、やがて六七十年のうちに保元の亂となつて爆發するのであり、つづいて源平の戦亂、平安時代の没落となるのであるが、その暗流は、すでにこの時代から流れ始めてゐたのであつた。康和四年十月十九日の中右記に、院中に落書があり、「佛法は火を以つて滅ぼすべく、王位は軍を以つて止むべし」といふおそろしい言葉が書かれてあつたと記してあるが、それは堀河天皇の崩御五年前のことである。平家物語にしばしば嘆かれてゐる佛法・王法の磨滅が、すでに豫言せられたもののやうに感じられる。要するに、豪華な院政時代の裏面には、このやうな不穩な思想が潜んでゐたのである。

應徳三年十二月十九日、堀河天皇は八歳で即位せられ、外戚藤原師實が攝政となつたが、同時に白河上皇が院中で政を執ることをお始めになつたので、攝政は名のみのものであつた。天皇十三歳の寛治五年十月二十五日に、後三條天皇の皇女篤子内親王が女御として入内せられ、やがて中宮にお立ちなされたが、その時の事情を今鏡には次のやうに記してゐる。

さてこの御時に、御息所は、これかれ定められ給へりけれども、御をばの前齋院(篤子)ぞ女御に参り給ひて、中宮に立ち給ひし。殊の外の御よはひなれど、幼くよりたぐひなく見とりたてまつらせ給ひ